

寺田透の「正宗白鳥論」(一九四七年)

井田 琇穂

一

本論文は、寺田透(一九一五—一九九五)の正宗白鳥(一八七九—一九六二)観を扱う。特に寺田の「正宗白鳥論」(一九四七年七月)に焦点を当てる。寺田は文芸批評家、小林秀雄(一九〇二—一九八三)の影響を強く受けて出発したフランス文学者であり、同時に文芸批評家である。ここで寺田透についての『大辞林』の説明を引用して、寺田透の概略を紹介する。⁽¹⁾

文芸批評家・フランス文学者。横浜市生まれ。東大卒。バルザック「一七九九—一八五〇」・ランボオ「一八五四—一八九二」・道元「二〇〇〇—二二五三」などを論じ、柔軟な批評精神によって、詩論・美術論など多方面に

「言語文化」11-3. 309-347ページ 二〇〇九年
同志社大学言語文化学会 © 井田琇穂

活躍。著「バルザック——人間喜劇の平土間から」「我が中世」「道元の言語宇宙」など。(p. 1740) [「」内の説明は筆者による。以下、同じ。]

寺田は、正宗白鳥論を発表することで文芸批評家として日本の文学界で出発したと言いうる。正宗白鳥にどのような点で寺田が引きつけられたのかを本論で扱う。ここで、正宗白鳥(まさむねはくちょう)についての前出『大辞林』の説明を引用して、正宗白鳥の概略を紹介する。

小説家・劇作家・評論家。岡山県生まれ。本名、忠夫。早大卒。(…。「何処へ」「微光」「泥人形」を書き自然主義文学の代表的作家となる。戯曲・評論にもすぐれ、「作家論」は他の追隨を許さない人物批評。小説「牛部屋の匂い」「入江のほとり」、戯曲「人生の幸福」。(p. 2389) [以下、引用中の省略(…)は筆者による。]

このような文学者を寺田透は評論の対象とした。筆者は寺田透の主に初期の批評活動に焦点をあてることを目的として本論を用意した。なぜ筆者が寺田透を扱うのか。自己引用になるが、筆者は「寺田透の夏目漱石観」(二〇〇六)の中で、「寺田の評論が「筆者に」広範囲な言語表現の世界を開き、その内実を教示してくれた」と書いた。⁽²⁾寺田没後十三年の現在でも、少なくとも寺田透だけを扱う著書は現在までの所未だ現れていないようなので、本論は存在意義があると思われる。

寺田透はどのようにして正宗白鳥に関わったか。「寺田透年譜」（田邊園子作成）によると、次のようである。⁽³⁾

一九四六年（昭和二十一年）三十一歳（…）安土正夫らの〈太陽〉（発行所浦和）に、（…）八月、「偏奇館性感冒」
（後「偏奇性感冒」と改題）を発表。中野重治の目にとまり、〈文学〉に正宗白鳥論執筆の機縁となる。

一九四七年（昭和二十二年）三十二歳 六月（…）「正宗白鳥論」を〈文学〉に発表。正宗白鳥の推奨するところとなり、のち「文芸」に再び白鳥論を執筆することとなる。（p.241）（括弧は原文のまま。省略は筆者による）

ここでの「偏奇館性感冒」は、永井荷風論である。⁽⁴⁾これは荷風批判の内容である。

この荷風論を中野重治（一九〇二—一九七九）が最初に認めた。上記の年表にあるように、寺田の「正宗白鳥論」（『文学』に発表）を更に正宗白鳥本人が認めたという事実が続く。この時期の寺田の履歴を略述する。日本が敗戦した翌年、寺田は四月、三十一歳で中央大学予科教授となり、翌年三月に旧制第一高等学校講師となった。上記の正宗白鳥の推奨については、寺田は後に「戦後四十年」の中で次のように書いている。⁽⁵⁾この「戦後四十年」の発表時、寺田は七十歳であった（白鳥没後十三年目であった）。

（…）今言ふ編集者が、かういふことを葉書で教えてくれたのだ。「原文改行」自分の入社早々の頃、先生「寺田

透」が、とその葉書にはあった。河出「書房」の出版物にお書きになるやうになった最初のきっかけは、河出孝雄社長の「文藝評論家で優れた人は誰かいませんかという」問ひに、正宗「白鳥」先生がそれは寺田透だと、同座の編集者たちが哑然とするやうな調子でおっしゃったことにあると、よく聞かされたものです。両方「正宗と寺田」を存じ上げてゐる私「葉書を寺田に寄越した編集者」には大変面白く思はれたので、云々。(p. 39)

このエピソードで、白鳥の推薦により、寺田が河出書房の出版物に評論を発表するようになったことが分かる。⁽⁶⁾ 白鳥が寺田を文芸評論家として高く評価したことが理解できる。寺田が「正宗白鳥論」を発表してから、白鳥が死去する一九六二年までの十五年間は、寺田は正宗白鳥の同時代人であった。白鳥が死去した時、寺田は四十七歳であった。寺田は「正宗白鳥論」を『文学』に発表し文芸批評家として発表した。このことを、寺田は「白鳥再見」の中で次のように言う。⁽⁷⁾ この「白鳥再見」の発表時、寺田は七十一歳であり、ほぼ四十年前のことを次のように寺田は回顧している。次の引用文での() 括弧内は原文のまま。

(…) 僕の文藝評論は永井荷風コントラ正宗白鳥といふ主題で始まったやうなもので、(荷風に対する尊重と愛惜は白鳥のみづからみとめる事実ではあるけれど、それならばそれなりに) 四十年後のかういふ機会「福武書店の正宗白鳥全集の完結時に、福武書店からその全集の月報に執筆依頼をされること」に白鳥に帰るのは、何者かの誘ひを受けた感じがしなくでもなこ。(p. 46)

このように寺田は、白鳥論から彼の文芸批評家としての出発を始めたことを認めている。ここまでは、正宗白鳥と寺田との接触について触れた。⁸⁾

次に寺田透の白鳥論を年代順に列挙する。

「正宗白鳥論」(一九四七年七月)

「『作家論』」(一九四八年二月)

「正宗白鳥の態度」(一九四九年六月)

「『日本脱出』について」(一九四九年十一月)

「白鳥小論」(一九五三年七月)

「『懐疑と信仰』」(一九五七年五月)

「荷風と白鳥」(一九六四年四月)

「正宗白鳥の初期小説」(一九七〇年九月、十月、一九七二年三月)

「白鳥の戯曲」(一九八六年十月)

「白鳥再見」(一九八六年十月)

これを見ると、一九四七年から一九五七年に白鳥を主題とした評論の発表が集中し、その年代から一九八六年に発表が飛んでいることが分かる(ただし一九六四年と一九七〇年代初頭に評論がある)。一九八六年とは上で引用文の中で注の形で筆者が言及したが、福武書店の白鳥全集刊行の時期である。更に一九四七年七月(「正宗白鳥論」発表時)以前に、白鳥に言及した評論がある。一九四七年三月に発表した「良心と固執」に次のように白鳥への言及がある。⁹⁾

この時、寺田は三十二歳であった。

杉浦「明平」が書くといふ白鳥論を僕はむしろ書かせてもらひたかつた。僕は荷風の擬態より白鳥の直截の方が好きだ。白鳥は言ひたいことが言ひたいやうに言へる数少ない才能の一人である。(…)(…)(原文改行)言ひたいことを言ひたいやうに言ふには、ただ精神に強さがあるだけでは足りない。(…)(…)どんな観念にも、どんな言葉のあやにも、又言葉の持つてゐる厄介な自己蕃殖の法則にも煩はされない、本当に自由な精神にのみ許された幸運だとも言へるだらう。実際、精神の自由は観念の体系や社会の条件から解放されてゐるばかりでなく、思考様式そのものの自由あるところに初めて成立つものなのだ。(p.67)

この引用に現れる杉浦明平(一九一三—二〇〇一)は、第一高等学校での寺田の先輩であるが、寺田の生涯の友人である。⁽¹⁰⁾引用文中に、荷風の擬態と白鳥の直截さという対比がある。これが荷風と白鳥との対比についての寺田の考えの要点である。更に白鳥は観念の体系や社会の条件から解放されていると同時に、彼の思考様式が自由であると、寺田は言う。ただし、白鳥がどの程度まで日本の社会の条件から自由であつたかという疑問を筆者は持つ。この場合、白鳥が精神的に、日本の社会の条件に束縛されなかつたという程度に寺田の言葉を理解したい。物理的には、白鳥は太平洋戦争の間、ほとんど執筆ができない状態(作品を発表できない状態)にいたので、彼は日本の社会に物理的に束縛されていたと言ひうる。しかし、精神的には、彼は日本の社会の条件に束縛されていなかつたと考えることはできる。

「良心と固執」の発表の同じ時期に、「わが罹災記」(一九四七年三月)で、白鳥について寺田は次のように言う。⁽¹¹⁾

彼「白鳥」はまづ批評家であった。といふことは自己の詠歎を描くかほりに、出来るだけ飾り気なく、意味を指ししめす言葉を記すことが、彼の出发点だったといふことである。むろんこのことにおいてもその記号として用ひられた言葉そのものが著しくパトスの統制に服してゐることを僕「寺田」は無視しようとは思はない。靈肉一致の理論家「岩野」泡鳴はそのためにほとんどつねに、彼「白鳥」に対する共感を語つたのである。(p. 64)

ここには寺田が批評家の存在をどのようか、明示されている。批評家は自己の詠歎を描かない、つまり、自己の詠歎からは自由になるのが批評の任務であると解釈できる。しかし、ここでの「出来るだけ飾り気なく、意味を指ししめす言葉を記す」というのは、あまり意味が明確ではなく、多分、批評とは、芸術作品や社会事象の記述、分析と解釈とを行い、それらに対する詠歎をいれないことであると、寺田は言いたのであらうと思われる。この引用文では、白鳥が批評家としての特質を持っていること、しかし、その特質の背後にパトス(情熱)を持っていたことを、寺田は指摘する。この引用にある岩野泡鳴(一八七三—一九二〇)は白鳥より六歳年長である。白鳥は岩野泡鳴の文学を高く評価し、寺田も自身の泡鳴論で泡鳴を高く評価している。ここまでに挙げた二評論は「正宗白鳥論」(一九四七年七月)と同じ時期に書かれたもので、端的に寺田透の白鳥観を理解できる。

先に筆者が発表した「寺田透の夏目漱石観」(二〇〇六年)で展開したが、寺田透は太平洋戦争での従軍兵士としての経験を通して、実体論者となった。これは一人の人間には一個の肉体しかないという認識であった。これは自分

自身の自意識ではなくて、自分の肉体を重視する立場である。このことを前提として、以下、寺田の「正宗白鳥論」(一九四七年七月)を見ていく。⁽¹²⁾

上記の「良心と固執」、「わが罹災記」において、白鳥の直截さ、精神の自由、パトスの統制に服す批評性に寺田は言及した。本論では、寺田の「正宗白鳥論」を扱う際に、主に以下の点について筆者は焦点をあてたい。

- (1) 一九一〇年から一九二〇年代までの白鳥の小説の主人公が夢想家であること。更に白鳥が幻想家であること(ここの「夢想」「幻想」という用語は、国語辞書の定義内の意味である)。
- (2) 一九四二年発表の白鳥の小説、「根無し草」において、観念が人生経験を照らしていること。
- (3) 白鳥の批評家としての資質と、悟性の人としての白鳥について。

寺田は白鳥の作品の魅力を次のように言う。

空襲で家を焼かれて転々と居を変へてゐる間に、僕は『泥人形』(一九一一年)『徒勞』(一九一〇年)『生まざりしならば』(一九二三年)『人さまざま』(一九二二年)『入江のほとり』(一九一五年)などを、(…)読んでゐるうち、正宗白鳥をもっとも懐しい作家の一人に数へてゐた自分に間違ひのなかつたことが確認された。(…)これらの作品は、日々生きる正宗白鳥といふ一個の肉体のリズムに狂ひなく裏打ちされて、きはめて柔軟で強靱な統一を持つ詩だといふ風に感ぜられた。(p. 75)

ここに寺田が上げている白鳥の作品は、白鳥が三十一歳から四十四歳までの間に発表したものである。ここで寺田が注目するのは、白鳥という作家の一個の肉体が作品全体を統制していることである。先に引用した「わが罹災記」では、白鳥のパトスが白鳥自身の言葉を統制していると寺田は言った。この二つの寺田の表現はほぼ同じ内容であると解釈できる。結局、白鳥の肉体から発している言葉を寺田は重視するのである。ここで分かることは、寺田が実体論者としての白鳥を評価しているということである。

更に、寺田は、白鳥が戦後、発表した作品について次のように言う。

(…)『新に惹かれて』『昔の彼と今の我』『わが生涯と文学』『交遊記』など、次々に発表された作品を(…)読んだ後、僕は自分の感想「白鳥の舌鋒が寺田を魅了したこと」を変へる必要のないことを益々強く感じた。(…)作品が肉声のやうにきはめて直接的であることが僕を益々惹きつけたのである。(p. 76)

上記の引用文で上げられている白鳥の作品は全て一九四六年に発表されたものである。白鳥六十七歳の作である。これらの作品を読むと、白鳥の肉声が直接的に聞こえてくるようである。寺田は言う。寺田が高く評価するのは、白鳥の作品が白鳥自身の肉声、そして多分、肉体を感じさせるといふ点である。ここでも実体論者としての寺田の立場が明らかである。

更に、寺田は、白鳥の小説の主人公が夢想家であるという特性と、白鳥自身が幻想家であることに次のように触れる。

(…)『入江のほとり』の「辰男にしても『泥人形』の守屋重吉にしても『心中未遂』「一九一三年」のおすゑにしても、『毒婦のやうな女』「一九二〇年」にしても『牛部屋「の臭ひ」』「一九一六」の菊にしても、むろん『徒勞』の壮吉は言ふまでもなく、正宗白鳥の描いた多くの男女は、夢想家だった。彼等にとっては、好いたらしい男をひっかけること、もう少し楽な生活が出来るやうになること、無気力な無目的な生活の行詰まりを何とかして打開すること、がいつも夢想されてゐる。現実にはさしせまる問題を彼等は意志と推理によつて解決しようとする代りに、夢想し、望ましい事態が起ればよいと思つて待つだけである。「原文改行」白鳥はかういふ人間たちと容易に気心があつてしまふのである。(p.80)

(…)正宗白鳥は何にもまして幻想家だった。(p.82)

この引用文中に上げられている作品は白鳥が三十四歳から四十一歳までに発表したものである。ここでは、寺田が考える夢想の内容が書かれていることに注意したい。それらの登場人物たちが夢想し、夢想したことが現実のこととなるために何か行動を起こすのではなく、受け身の立場であることがここで扱われている。

上の引用で、白鳥の作品は「詩」であると、寺田は述べた(『評論ⅠーⅠ』、p.76)。上記、引用の直前の文で、次のように寺田は言う。寺田は、白鳥が小説を作り出す程に、ある「観念」を造型化はしていないと言っている。白鳥は、「観念」を徹底して造型化できていないため、白鳥の作品は寺田の考えでは小説ではなく詩である、ということになる。⁽¹³⁾ある「観念」を十分に造型化しえて、その結果、小説を作り出せるという考えがここにはあると言える。

典型を生んだと言はれるまでに小説家が、異常に強烈な個性を生み出すためには、恐らく人間のうちにある、物欲とか愛欲とか信仰とか愛とかいふいはば観念的実体が、人間の全存在をいかなる行為に駆り立てるか、それを、物質を見るやうに明らかに、洞察せねばならないのである。いはば肉体となったそれらの観念そのものの行動を描く必要があるのだし、そのためには情欲や物欲を人間の中でまどろませ、それ自身についての幻想に耽けらせなくてはならないのである。(p. 82)

寺田の言う小説では、観念的な実体に極限まで動かされるような典型的な人物が登場するということであるようだ。ここで多分、寺田の念頭には、多数の典型的な登場人物を小説の中で活躍させたフランスのバルザック (Honoré de Balzac [一七九九—一八五〇]) があつたと思われる。このような小説と、白鳥の書く小説とは違つと寺田は言う。

寺田は更に白鳥の太平洋戦争中の作品「根無し草」(一九四二年)を哲学的な作品であるとする。⁽⁴⁾ 白鳥が詩のような小説を書いたと、寺田が考えていることを上述した。その上、「わが罹災記」(一九四七年)で、白鳥が批評家であつたと寺田は述べた。「根無し草」で、白鳥が自分の人生を批評家として分析していると寺田は次のように続ける。

(…)『外を恐れる』『永遠の恐怖』『女性を恐れる』などといふ「根無し草」の見出しにすでにそれが窺はれるやうに、彼「白鳥」が自分の人生経験を、何等かの観念によって照し出し、その意味をとらへようとしてゐることが読むにつれてはつきりと分つて来る。(…)今白鳥の行はうとしてゐるのも、できるだけ豊かな哲学的意味

を現実の生活経験のうちから見出し、それによって生活経験に秩序と、秩序がもたらす実在感を与へようとする
ことにあるのでなからうか。(p.98・d)

この「根無し草」は白鳥六十三歳の作である。この作品は八章に分かれていて、「外を恐れる」「永遠の恐怖」「女性
を恐れる」「友人に恐れられる」「学校卒業」「人生の門」「江戸のほひ」「数人の学友」がそれらの章の表題である。
この中で、白鳥の少年時代から、一九一〇年(明治四十三年)(三十一歳)の読売新聞社退社あたりまでのことが小
説の形にされている。この小説で、白鳥は少年時代から「人間の靈魂の行方」が気になり、自分の心にもある種
の恐れを持ち、生きる上でのさまざまなこと(15)で空想にふける人物として、自分を扱っている。ここで寺田の言う観念
とは、「人間の靈魂の行方」、「自分の心の中」、「人間世界の實在」、「男女関係の罪悪」、「生存への恐怖」などという
内容の観念である。このような観念を使って、白鳥は自分の過去の体験をまとめていっている。この「根無し草」の
中で、白鳥が自身のことを空想家であるとしているが、これは寺田の言う白鳥は幻想家であったという発言に近い。
この引用した文の直後で、白鳥を人生批評家として寺田は規定し(p.98)、白鳥がいれば人生批評家の側面を感じさせ、
白鳥は小説の形で発表しているが、その中身は人間の諸条件を考察したものであると寺田は次のように言う。

(…) たしかに「白鳥は」緻密なその頭脳を、今おのが人生に向けて働かせてゐるにちがひないのだ。それは小
説家の物の見方とはちがって、もっと抽象的な、主観の色著しい、人間そのものではなく人間の諸条件について
の物語の形をとった考察ではあらうか。(p.86)

更に、ここで白鳥の頭脳が緻密であると寺田が認めていることを確認する。

次に、白鳥が森鷗外(一八六二—一九二二)に対する親近感を抱いていることに触れ、白鳥が悟性の人であると、寺田は以下のように言う。

悟性的存在「鷗外」に共感を感じるのが悟性的存在のみであるとすれば、白鳥も又悟性の人なのだ。(p. 87)

ここでの寺田の「悟性」の用語法について一言、説明する。寺田は前出「わが罹災記」(一九四七年)の中で、鷗外の史伝に触れ、「悟性」について次のように言う。

悟性は、対象なしに論理的独自の意図を吐く理性ではない。悟性は、形而上学的思弁に赴くよりは、風俗と歴史のうちにある確実な自己証明の場を求めようとする。それが『洪江拙斎』や『伊沢蘭軒』の意味である。(…)彼ら「これら史伝の主人公達」が一つの悟性の自己証明の場だといふ精神的事実(…)。『評論Ⅰ—Ⅰ』p. 65)

ここで悟性と理性とを寺田は区別している。理性は対象なしに論理的に独自の糸を吐く、即ち、理性は形而上的な思弁を行うと寺田は規定する。これに対して、悟性は風俗と歴史という対象があり、その対象の中で自己証明をするというように寺田は考える。このような悟性を白鳥は持っている⁽¹⁶⁾と寺田は考える。白鳥がこの悟性を体現した文学者で

あると寺田は考えている。

この「悟性」に関しては、「正宗白鳥」という座談会（一九四八年）の中で、次のような発言を寺田はする。⁽¹⁷⁾この発言時、寺田は三十三歳である。

(…) 僕が「白鳥を」悟性の人といふわけは、悟性といふのは理性とちがって、何かを突きとめようとして、対象の中で自分を失ったりしない、対象の中にもぐってもそれ自身の首尾一貫した論理だけは守ってるよとす
る、さういふ意味で夢見ることだって出来るんですよ。(…) ああいふ人「白鳥」が異常なものに心を惹かれても不思議はないんだと思ふな。(p.45)

ここで寺田は白鳥の頭の働き方に言及し、白鳥は自分に分かる範囲で了解し、対象の中に入っても自分自身の一貫した論理を失わないでいることができるとする。このような意味で、白鳥を悟性の人であると、寺田は考える。

この節では、寺田の「正宗白鳥論」（一九四七年七月）の内容を扱った。特に寺田の論点である白鳥の作品の登場人物の夢想家であるという特徴、人生批評家としての白鳥の特質、悟性の人白鳥の特質について考察した。

二

この節では、白鳥の作品について次の点を論究する。寺田が主張するように、白鳥の三十四歳から四十歳頃の小説

の登場人物たちが夢想家と言えるかどうかを検討したい。その白鳥の小説の分析の際に、小説の中での話者(narrator)の視点をも考えることとする。

先ず、寺田は白鳥作の「入江のほとり」「泥人形」「心中未遂」「毒婦のやうな女」「牛部屋の匂ひ」「徒勞」に言及し、次のように述べている。

彼等「上記作品の登場人物たち」にとつては、好いたらしい男をひっかけること、も少し楽な生活が出来るやうになること、無気力な無目的な生活の行詰まりを何とかして打開すること、がいつも夢想されてゐる。(『評論I—1』p.80)

更に、次のように言う。

(…) 実は彼女達『微光』のお国、『毒婦のやうな女』のおかつ」の空想はしばしば物欲の声を聞き、それによつて導かれてゐた(…)。若かつた白鳥はこの夢に生命を与へ、それを深化することが出来なかつたまでである。(『評論I—1』p.85)

ここでは、白鳥の作品の登場人物たちが夢想家であることを寺田が述べている。更にこれらの作品を完成した時点での白鳥の若さにも寺田は言及する。この白鳥の若さについての指摘は重要である。例えば白鳥が七十歳から七十四歳

までに完成した『日本脱出』の女主人公みどりも物欲にとらえられていると寺田は言っている。⁽¹⁸⁾この白鳥七十歳台の作品で、幻想家としての白鳥自身の特性と物欲にとらわれた女主人公を、かなりの程度に発展させたと言いうる。以下、上掲の白鳥の作品を発表年代順に、具体的に検討する。

「徒勞」は一九一〇年、白鳥三十一歳の作である。⁽¹⁹⁾この作品の主人公の名前は壮吉で、精神的な疾患のある人物である。吉田精一（一九〇八—一九八四）は、この小説を白鳥特有の、妖気のただよう世界を作っている作品で、ぶきみささを感じると言う。⁽²⁰⁾この作については、白鳥は「事実と想像」（一九一七年）の中で次のように言う。⁽²¹⁾

比較的私「白鳥」のあの頃の気持をよく出して可成りに思ふやうに書けたと思つてゐるのは『徒勞』といふ作です。あれには確かなモデルがあるのですが、あの男には私が共鳴を感じてゐたのでした。精神に異常のある男でした。（p. 268）

このようにこの作にはモデルがあるとのことである。確かに白鳥の言うように、主人公の壮吉は精神に異常のある男で、妄想にとらわれている。壮吉は三十半ばの年齢であるが、次のように二十代のある時期に神の声等を聞く。

彼れ「壮吉」は十年前雜司ヶ谷の畑の中の一軒家で、神の声や魔物の声を聞いてから、世界が全^{まる}で違つて見え出した。（p. 340）

その結果、妄想にとらわれ、近い将来に理想の養育院を建てることを壮吉は考える (p. 354)。このように壮吉は空想(妄想)にふける人物で、誰かに監視されているというふうには神経質になり、次のように恐れる。

壮吉は(…)心は只昔その「家の回りをウロウロしている」変な奴の事のみ凝固まった。(…)自分の計画「近い将来に理想の養育院を建てること」もそのために阻礙されさうな気がした。母や弟妹にまで災を被らさうとしらるるのだ。(p. 359)

この「変な奴」は、作品の中で壮吉の妄想が作り出したものとして描かれている。このように、壮吉は存在しないものにおびえている。

このような壮吉のことを、父(田舎の仕事をやめて東京へ出てき、既に小金を貯めて持っている人物)は、壮吉を生まなければ良かったと次のように言う。

「やうだ、生まなけりゃよかった。氣狂ひや親不孝ばかり生むつもりはなかった」と、父は自分を嘲けるやうに云った。(p. 351)

ここで、親不孝者とは、父の指示に従わない自分の娘のことであり、「氣狂ひ」とは壮吉のことである。このように、「徒勞」の主人公の壮吉は、精神の異常があるために引き起こされる妄想の世界に住む人物である。この場合、妄想

は病的なものである。

次に「泥人形」を見る。⁽²²⁾これは一九一一年の発表で、白鳥三十二歳の作である。この作は白鳥自身の結婚時のことを題材にし、作中に白鳥の妻と妻の家族のことが書かれている。この作については、白鳥は一九一七年に発表の前出の随筆「事実と想像」で、原稿の締め切りに迫られて、事実を書き流してしまい、現在いやな感じを持っていると述べ、次のように言っている。

(…) 當時から今に至るまで、『泥人形』ほど私「白鳥」に取って厭な感じをさせてゐる作はありません。(p. 267)

この作では守屋重吉という白鳥自身と考えられる主人公と、その妻とが主要人物である。この作品で妻(時子)の視点から夫への不満の表明と妻の心の中の描写がある。⁽²³⁾作者白鳥は妻の心の中の描写をし、夫の描写にそれを対照させることで、作品に客観性(均衡)をもたらしている。しかし、主人公の守屋重吉が夢想家であるということはこの作品の中に明示されていない。この小説は白鳥の妻を傷つけ、これ以後、妻のことを直接、小説の中で白鳥は書かなくなると、伊藤整(一九〇五—一九六九)は次のように述べている。⁽²⁴⁾

(…) それ「泥人形」は「白鳥の」妻「つね」の心によほど深い傷を結果として与えたと推定される節がある。青野季吉「一八九〇—一九六一」もまた若い時から白鳥の愛読者であったが、「白鳥はあの『泥人形』のあと、

その細君を直接に描いた作品はその後にはない」と述べていた。(p. 190)

このような伝記的な事実は、寺田の論点とは直接関係はないが、「泥人形」の作品の内容に関係している。

続く「心中未遂」は一九一三年、白鳥三十四歳の作である。⁽²⁵⁾これは、女主人公おすゑが、病気のため魂のない人形のようになった息子朝吉を残して、経済的な理由から女中奉公に出る話である。寺田の言うように、おすゑは、「も少し楽な生活が出来るやうになること」を望んでいたと思われるので、その意味でおすゑは、ごくどこにでもいる消極的な夢想家であるかもしれない。しかし彼女が積極的な夢想家であるとは作品で明示されていない。ただし、作品の中でおすゑは物思いにふけったり、夢見たりする人物として次のように描かれている。

(…) おすゑは取留めのない考へに耽りながらも、身體中残る隈なく磨上げた。(p. 111)

(…) 「まあ綺麗な家だわね」と、思はず「おすゑは」云って、夢見るやうにうっとりした。(p. 112)

(…) ややもすれば廊下に立って、ほんやり何處ともなく「おすゑは」見詰めてゐた。(p. 113)

かうと知ったら、もつと早く奉公に出ればよかった。あんな苦労ばかりしないで済んだのに…と、独り思耽つて元気づいてゐた(…)。(p. 114)

このような人物おすゑが、この作品のタイトルが示すように、自分で一度愛想づかしをした夫、勇吉と心中未遂をするのは、生きていても仕方ないというおすゑの絶望感によつてである。以下のように作品の中にある。

「私なんぞ生きてゐたつて仕方がないんだわ」と、ホロホロ落ちる涙を袂で「おすゑは」蔽うた。(p.114)

このように死を考えるほど絶望できる点で、逆に彼女は希望が大きかった、即ち、大変な夢想家であつたと言えるかもしれない。希望が大きければ大きいほど、逆に希望が閉ざされた場合の絶望が大きくなるとは考えられる。このように考えると、この作品で寺田の言う主人公が夢想家であるというのは妥当だとも言える。

次の「入江のほとり」は一九一五年に、白鳥三十六歳の時に発表された作である。⁽²⁶⁾この作品は私小説に近いものである。⁽²⁷⁾この作中の人物である長男、栄一が白鳥を暗示すると考えられる。この作の主人公は、栄一の弟である辰男である。彼は、岡山の田舎の小学校の臨時教員をしている三十歳近い年齢の人物として設定されている。この小説の中で複数の登場人物が夢想する場面が三箇所ある。一箇所目は、辰男の妹の勝代が、東京での学生生活を送る自分の姿を空想する場面で、次のように作品で表現されている。

(…)[勝代の]心は動もすると書物から離れて、外の思ひに疲れた。深夜も白晝のやうな東京で、落第した自分がモルヒネか何かの毒薬を飲んで自殺する悲しい有様を空に描いたり、西洋の婦人と自在に会話を取かはしてゐ

る得意な有様に胸を轟かせたりして徒らに時を過した。(p. 238)

ここで勝代は東京での自分の姿をプラス面(楽天的に)とマイナス面(悲観的に)両方で夢想している。楽天的には、自分が英語を自在に使っている姿を、悲観的には、自分の自殺する姿を彼女は夢想する。

二箇所目は、独身の辰男に、辰男の親を通して縁談の話があり、辰男は未来の妻のことを夢想する場面で、次のようである。

(…) 自分「辰男」に女房の出来るのが不思議でならなかった。(…) そして勝代が「東京の学校に進むため実家を」出て行った後で、まだ見たこともない女と自分とが、この二階に住ふことを、夢のやうに感じながら、ぐっすり睡眠に陥った。「原文改行」翌日学校の往帰りの途中でも、彼れは屢々結婚について珍らしげに考へた。(p. 243)

このように辰男は自分の未来の結婚生活を夢想するが、この縁談は消えてしまい、その後で、次のような箇所がある。

(…) 縁談は、碌に話し進まぬ中に立消えになって、(…) 彼れ「辰男」は二三日妄想に悩んだだけで、元の彼れに返って、テーブルに釘付のやうになってゐられた。(p. 244)

この箇所では、辰男は妄想に悩んだとあり、これは夢想よりも強い表現である。その妄想に悩んだ後は、平常心に戻り、毎日の日課の英語の独学を続けるのである。

三箇所目は、辰男の不注意で、一家が住む家の、二階の辰男の部屋から火が出る場面である。この火は、辰男の家の一家全員で消し止めるが、辰男は全てが燃えてしまうことを夢見たと、次のように本文にある。

(…)そして、いつそ今夜の火事が拡がって、机も書物も家も、自分自身「辰男」も焰の中に包まれて、燃えてしまえばよかったやうに思はれ出した。「原文改行」家から家へ火が移って、村一面に焰の海となつて、見覚えのある村の者共が顔や手足を焼焦がして泣叫んでゐる光景を彼れは夢みた。(p. 252)

これは、自分自身を含めての全ての物の破壊願望であり、上記作品「心中未遂」のおすゑが死を願望するのと似ている。辰男の破壊願望は、彼の日常生活からの脱出願望を示す。この「入江のほとり」では勝代と辰男とが、空想したり、夢想したりする人物として読者に提示されている。付加すべきことは、この作品では勝代、辰男、長男栄一の心の中の描写が見られる。即ち、この小説の語り手が、これらの三人の登場人物の心の中に入って、その心の中の描写をしているということである。三人の登場人物を客観的に描写することで、作品の構成を立体的にしている。

次に見る「牛部屋の匂ひ」は一九一六年、白鳥三十七歳の作である。⁽²⁸⁾この作については、白鳥が「事実と想像」の中で、事実に基づいた作であると、次のように認めている。⁽²⁹⁾

『牛部屋の匂ひ』は終りの泥棒に入る所は作り事です、略々事実に基いてゐます。幼年時代から私「白鳥」の熟知してゐる家庭で、材料が豊富なのに、私の筆が萎けて十の一も書けなかつたのが遺憾です。あの中の話には私が直接に聞いたことそのまゝ、なのが多です。(p. 268)

このようにこの作は、白鳥の故郷、岡山の実在の人物たちを題材としたものである。この作では、女主人公菊代(二十代後半の年齢である)は八十歳の祖母と両眼の見えない母お夏と、三人で牛部屋で暮らすという設定である。菊代は二人の夫を持ったが、一人目は軍隊で死に、二人目の夫は朝鮮へ出稼ぎに出かけて家にいないということである。

菊代が夢想家であることは作品で明示されていないが、朝鮮に出稼ぎに行っていた夫の繁松が日本に戻った時に、菊代は夫に現在の住む場所から他の所へ連れて行って欲しいと言う。現実の生活を全て捨てたいという願望を次のように、菊代は言う。

「思ひ立った時に直ぐに行かには、愚図々々してる間にや家が出られんやうになるもの。うち「菊代」はこれまでに何度も一人で他所へ行つてしまはうかと思つたことではあつたけれど、お母や祖母のことが気に掛つてどうしても行けなんだ。ちゃけど今夜なら覚悟がついたのぢや。この船が出せにや、伝馬にでも乗せて連れて行つて下んせ」(p. 321)

この引用文の中で、「これまでに何度も一人で他所へ行つてしまはうかと思つた」と彼女の願望を述べている。夫の

繁松に再会して、実際に行動しようと菊代は思い、繁松に自分を外へ連れ出すように頼む。ここでも、自分一人では実行に移せない菊代の性格が出ているので、寺田の言うように、菊代は夢想し、「望ましい事態が起ればいいと思つて待つだけ」(p.80)の人物である。ここでも繁松が現れなければ、菊代はこの土地を最終的に離れる決心はつかなかったと推察できる。この意味で、この作品での主人公が夢想家であるという寺田の言葉は当てはまる。

次に見る「毒婦のやうな女」は一九二〇年、白鳥四十一歳の作である。⁽³⁰⁾この作の中で、女主人公おかつが新七と関係ができるが、その新七の兄、幸吉(幸吉と新七との実家である店の跡取り長男)をおかつが誘惑する内容である。この作を吉田精一は、女性の特殊な心理を描く作として分類している。⁽³¹⁾おかつは幸吉を誘惑することを夢想するだけではなく、実際に幸吉に三度、誘惑のための手紙を出すという行動に出ている。寺田は、一般論の形であるが、白鳥の初期作品の主人公について次のように言っているが、おかつは行動に出ているのである。

現実さしせまる問題を彼等「白鳥の初期小説の主人公たち」は意志と推理によって解決しようとする代りに、夢想し、望ましい事態が起ればいいと思つて待つだけである。(『評論Ⅰ-Ⅰ』p.80)

おかつの行動に触れる前に、ここで、もう少し詳しく、おかつがどのように夢想家であったか、作品の中に見たい。新七の兄である幸吉に惹かれたおかつの心の中の描写は次のようである。

長い間恋焦れてゐた男にめぐり会つたやうな気持で、おかつは幸吉の顔形を何時までも目の前に浮べては弄んで

ぬた。(p. 471)

ここでおかつが幸吉のことだけを考えていることが読者に分かる。おかつは、一人の男だけを愛するのではない、多情な女として作品で描かれている。彼女は新七だけに満足できる女ではない。このおかつは、自分の美しさに次のように自信のある女である。

「ステキな女だ」と、擦違ひに若い者から聲を掛けられると、自分「おかつ」がすべての男の目を惹いてゐるやうな誇りを覚えた。(p. 476)

このようにおかつは自分の女としての魅力を意識しているのである。彼女は全ての男の注意を引くことに誇りを感じるナルシストの面を持っている。更におかつは幸吉に近づくことを次のように夢想する。

(…) 親しく幸吉に近づける手段を空想しながら、今度は早速く家へ「おかつは」帰った。(p. 476)

ここには幸吉に近づく手段を空想しているおかつが出てくる。このおかつの幸吉への思いは次のようである。

(…) おかつは(…)自ら励ました。「ビクビクして尻込みしたって災難が落ちて来る時にゃ来るんだから、思ふ

存分やって見なければ嘘さ。一目見た時から、この人「幸吉」になら命かけても思ったのだもの」(p. 482)

この引用での「思ふ存分やって見なければ嘘さ」というおかつの言葉には、考えたことを即座に行動に移すおかつの性格がうかがえる。幸吉との恋愛に自分の命をかけるという決心を彼女はここで表明している。おかつは単なる夢想家ではない。おかつは一方的に幸吉を思っているだけではなく、幸吉も自分に関心があることを見透かし、次のように言う。

弟「新七」によく似てゐる兄ではないか。(…)どうせ「幸吉の」腹の中は分つてゐるのではないか。(p. 490)

おかつは、自分が関係を持った新七について十分に知っているという自信がある。その新七と幸吉とは兄弟であるから、二人ともおなじように自分に魅惑されるという自信があるのである。

このようなおかつが三度、幸吉に手紙を出した後、幸吉はおかつに会うことになる。幸吉はおかつに惹かれる自分と、おかつと関係をもった場合の幸吉自身の家庭の崩壊の危機を意識し、おかつを毒婦と呼ぶ。次のように作品にはある。

おかつの媚びを含んだ眼差は幸吉を戦かした。自分の破滅を恐れたやうに思はず後退りして、「あなた「おかつ」のやうな人こそ毒婦と云ふんだらう」と、声を震はせて「幸吉は」云った。顔にも血の気を失った。(p. 504)

ここで、「幸吉を戦かした」に明らかのように、おかつの眼差しに幸吉は強く誘惑され、幸吉の心は極端に困惑していることが分かる。このようにこの小説の語り手は、幸吉の心の様子を描写している(語り手は作中で新七の心の中も描写している[p.488])とをここで付加する)。おかつは、この場面で幸吉を見切ったようである。そのようにこの作品の結末はなっている。次のようである。

おかつは愚図々々してゐる幸吉を侮蔑した目で見ながら、梯子段から下を覗いて、「主婦さん、若旦那「幸吉」はお帰りになるんですって」と叫んだ。(原文改行) 幸吉は逃げるやうに出て行った。(p.504)

このようにこの作品の結末は、おかつが幸吉に見切りを付けた形になっている。ここで、彼女は自分の熱い気持ちを受け止めることのできる男を幸吉に求めたと言いうる。彼女は、決然と見切りをつける、いわば男性的な性格の女性として、ここで描かれている。寺田の言うのとは違って、おかつの情欲が彼女の夢境内にとどまてはいない。彼女は行動の人である。しかし、おかつが自身の情欲により幸吉を虜にし、最後の地点まで行かないことは、小説の中で明らかである。寺田の次の言葉がこのことを的確に表現している。

彼女「おかつ」の情欲の描写はこの程度の彼女自身の夢の範囲内にとどまてゐて、情欲自体が彼女をつつきまわし、彼女をくぐつとし、その行為が彼女自体だといふやうなことにはならない。(『評論ⅠーⅠ』p.81)

確かに、寺田の言うように、おかつは作品の中で男を徹底的に狂わして、破壊させてしまうような型には描かれていない。そのような結末になるようには、白鳥は描いていない。

以上のことから、寺田の言う、白鳥の比較的初期の小説での登場人物が夢想家であるということは大部分、当てはまることが分かる。しかし、この場合の夢想の身上に濃淡があると言いうる。「徒勞」の壮吉は精神異常のある妄想家であった。すなわち、病的な夢想家という、極端な夢想家に、壮吉は分類できる。「泥人形」の守屋重吉は、現実主義者であり、夢想家ではない。「入江のほとり」の辰男は時々、夢想はするが、頑固な変わった人物であった。「牛部屋の匂ひ」の菊代は下層で生きる女性の一人であった。但し、「入江のほとり」の辰男、「心中未遂」のおすゑと「牛部屋の中」の菊代は、共通して現在の生活から脱出して、別の新しい生活に移りたいと強く思う夢想家であったが、作品中で、自分一人ではそれを実行できない人物たちであった。「毒婦のやうな女」のおかつは自分の夢想を自分一人で実行に移す行動的な夢想家であったが、その行動は不徹底であった。以上のように、極端な夢想家、一人では行動に移せない夢想家、一人で行動に移すことのできる夢想家と三種類の夢想家に、白鳥の比較的初期の小説の主人公を分類できる。

ここまでで、寺田の言う、白鳥の比較的初期の小説での登場人物が夢想家であるという点について、白鳥の作品に沿って、検討した。

ここでは、以上のことへの補説として、白鳥の小説についての寺田の考えを更に付加する。寺田は、白鳥死去の際の座談会「正宗白鳥」(一九六三年)の中で、白鳥の作品として、「入江のほとり」と「生まざりしならば」を高く評

価し、次のように言う⁽³²⁾。

(…)「入江のひとり」や「生まざりしならば」のようなもの、あれも「白鳥の『作家論』と共に」残るんじゃないか。⁽³²⁾ (p.159)

寺田がこのように、高く評価する「生まざりしならば」は、本論で扱っていないので、ここで、未検討のこの作を検討する。寺田は、この作について、「白鳥小論」(一九五三年)の中で次のように言う。

(…)その思想が本来相對主義であつたために、『牛部屋の匂ひ』や『生まざりしならば』のやうな透明な、幻覺のやうに美しい小説や、『安土の春』のやうな縹渺とした芝居も「白鳥は」かけたのではないかと思はれる。そこにあるのはいはば精妙な假説の美しきである。⁽³³⁾ (p.228)

ここには、白鳥の思想が相對主義であり、そのため多様な世界を小説と芝居の中で展開できたと、寺田は考えている。假説を作るように多様なストーリーを白鳥が作ったということである。寺田が高く評価した「生まざりしならば」は一九二三年、白鳥四十四歳の作である。⁽³³⁾ 寺田は、この作を上記の引用のように、「透明な、幻覺のやうに美しい小説」と言った。吉田精一は、この作品について白鳥の大正後期の代表作の一つであり、強い現実感をもった力作であると評言している。⁽³⁴⁾ 作のタイトルには、小説の中の親の立場からその子供を生まなければよかつたという含みがある。こ

の小説では、牛島夫妻とその息子俊一（十歳）が中心的な登場人物である。夫の牛島長吉（三十代後半）の不身持ちのため、骨膜炎の息子俊一が生まれたという設定である。長吉の妻おそでは元芸者である。小説の結末で、牛島夫妻間の口論と殴り合いのけんかの間、俊一は玄関先まで行き、そこで倒れ、そのことを夫妻は知らないというように終わる。牛島長吉の浮気心、おそでとその妹の計画する事業のこと、俊一の看護をするために雇われている上田のことが、この作の副筋になっている。この話では、息子俊一への妻おそでの強い愛情が、次のように強烈に描かれている。

(…) おそでは、(…) 俊一に寄添って、(…) 彼れ「俊一」の身体中を舐尽したいやうな情炎に燃えてゐた。(…)
おそでは出来るものなら、俊一の骨をも肉をも腐らせてゐるさういふ膿を、自分の臂で吸取ってやりたかつた。(p. 177)

これは、自分が生んだ子への愛情から、その子の病気を治したいという母の気持ちの表現である。ここでの「情炎」は、おそでの気持ちの激しさを表す。このような情念の激しい妻に対して、夫長吉は次のように危惧を感じている。

喜怒哀樂の昂進した時のおそでの暴動の物狂ほしさを、彼れ「長吉」は危かしがつてゐたのであつた。(p. 180)

この気性の激しい妻と、小説の結末で、夫は殴り合いのけんかになる。息子の俊一は、両親のけんかから逃げようとして、玄関先で倒れることになる。その場面では、両親のエゴイズムが小説の前面に出ている、両親は俊一の気持ち

(両親のけんかを見た心の動揺)を無視している。

このような夫婦の息子俊一は、上述の「入江のほとり」、「心中未遂」、「牛部屋の匂ひ」の主人公たちと同じく、どこか別の世界へ逃亡することを夢見る人間として描かれている。俊一は両親にも他の回りの人間からも離れた自由な場所を求めている人物として次のように読者に提示されている。

(…)彼れ「俊一」は、知らない誰かに連れられて、遠い處へ行つても構ふことはない、ひとりで覚悟を極めてゐた。むしろさうなることを待設けることさへあつた。(p.195)

このように白鳥は、この作で独特な世界を作つたと言える。牛島の妻おそでの情念の深さ、その息子俊一の自由な場所を求める救いのない心境が強烈に描かれている。この作を寺田は、「牛部屋の匂ひ」と共に、「透明な、幻覚のやうに美しい小説」と理解した。

ここままで、寺田が高く評価する白鳥の「生まざりしならば」の内容の検討を補足した。

四

本論では寺田透の「正宗白鳥」(一九四七年七月)に焦点を当てた。特に、白鳥の三十四歳から四十歳頃までの小説の登場人物たちが夢想家であるという寺田の主張を具体的に検討した。結局、その場合の夢想の中身には、登場人

物によって濃淡があることを筆者は見た。しかし、白鳥の初期作品の登場人物が夢想家であるということと、白鳥の小説の構造と白鳥の若さとの密接な関係に寺田の論が及んでいることを筆者は指摘した。⁽³⁵⁾

* 査読者に、本論文に詳細な訂正の指摘を行っていただいたことに感謝する。ただし、論文作成の形式（各節の始めにこれから論ずる内容の紹介を置き、各節の終わりにその節で論じた内容をまとめるとい形式）と、寺田と白鳥の年齢に何回も言及する点については、筆者の型を通したことを、御理解いただきたい。

注

- (1) 松村明編、第三版（三省堂、二〇〇六年）。
- (2) 『言語文化』（同志社大学言語文化学会）九一二（二〇〇六年）、pp. 303-321。引用箇所はp. 303。
- (3) 寺田透『遷易不尽（寺田透遺稿集）』（講談社、一九九六年）、pp. 239-275。
- (4) 以下、『寺田透・評論』から引用する。『寺田透・評論』（思潮社）は第Ⅰ期全七巻（一九六九—一九七五）と第Ⅱ期全八巻（一九七九—一九八一）がある。引用の際、『評論Ⅰ—Ⅰ』のように表記する。これは『寺田透・評論』第Ⅰ期第Ⅰ巻のことである。更に、『寺田透・評論』に含まれていない寺田の評論（一九七三年以後に発表されたもの）は単行本からの引用とする。「偏奇館性感冒」は『作家私論』（改造社、一九四九年）に所収。『評論Ⅰ—Ⅰ』、p. 52-59。『評論Ⅰ—Ⅰ』では改題された「偏奇性感冒」の題である。

- (5) 『群像』一九八五年八月号初出。『不可測の振幅』(筑摩書房、一九九〇年)、pp. 34-39。
- (6) 河出書房の出版物への寺田の執筆は、彼の前出の年譜の一九五〇年、一九五四年の項目で確かめることが出来る(pp. 243-247)。
- (7) 『群像』一九八六年十月号初出。前出『不可測の振幅』、pp. 46-50。
- (8) 寺田は中野重治を、同時代の文学者として敬愛していたと言える。中野が単に文学者だけの存在ではなく、思想的社會運動家であったと、寺田は評価する。寺田「中野重治の死の折に」(『群像』一九七九年十一月号初出。寺田『文学の運命』(構想社、一九八〇年)、pp. 11-14)を参照のこと。
- (9) 『文芸往来』(鎌倉文庫)一九四七年三月十七日初出。前出『作家私論』所収。『評論Ⅰ-Ⅰ』、pp. 67-71。
- (10) 『寺田透評唱』(『現代詩手帖』(六月臨時増刊)二十一-七「思潮社、一九七七年)所収、杉浦明平「物忘れと疑問」(pp. 52-55)参照。
- (11) 『アララギ』一九四七年三月初出。前出『作家私論』所収。『評論Ⅰ-Ⅰ』、pp. 60-66。
- (12) 『文学』(岩波書店)一九四七年七月初出。前出『作家私論』所収。『評論Ⅰ-Ⅰ』、pp. 72-87。
- (13) 小説の造型性と「詩」との関係については、寺田は白鳥没後の座談会「正宗白鳥」(『群像』一九六三年一月号、pp. 145-159。中村光夫「一九一一—一九八八」、平野謙「一九〇七—一九七八」が出席)で次のように述べる。この時、寺田は四十八歳で、「正宗白鳥論」発表後十六年経過している。

(…) 小説的な造型ではないけれども、散文詩風な造型という点ではずいぶん苦勞して完璧性を「白鳥は」狙っているのじゃな

いですか。(…) ぼく「寺田」なんかにしてみると、あの人「白鳥」の作品が好きなのは、小説としてというより、それが精神のはたらきに非常に近い出来方をした、別次元の、詩の世界みたいなものだからです。(pp. 148-149)

この寺田の発言に対して、平野謙は白鳥の作品を散文詩とか、詩とか言わないで、単に散文と言っても良いのではないかと、寺田に反論している。中村光夫は「それは寺田さんの散文論で、すこしフランス的過ぎるな。今の寺田さんの話は非常におもしろかった。」(p. 149)と反応する。

- (14) 『日本評論』十七ー一八(一九四二年一月〜八月) 初出。『正宗白鳥全集』四(新潮社、一九六六年)、pp. 37-96。正宗白鳥の全集には、新潮社版(全十三巻、一九六五―一九六八)と福武書店版(全三十巻、一九八三―一九八六)がある。本論文では、新潮社版から引用する。但し、新潮社版に含まれていない作品からの引用は福武書店版全集による。新潮社版全集の詳細については、中島河太郎「全集編纂について」(『正宗白鳥全集』一「新潮社、一九六五年」付録)がある。それによると、白鳥生涯の全作品の分量は二五〇〇篇であるが、新潮社版全集には約一〇〇〇篇をおさめているとのことである。新潮社版全集には、白鳥全作品の中で、小説は二割弱、戯曲、随筆、翻訳は半数、評論、回想、詩は大部分を収録したということである。

- (15) 「人間の靈魂の行方」という句は、「根無し草」の中の章「永遠の恐怖」「江戸のほひ」「数人の学友」の中に現れる。更に、登場人物(白鳥自身に近いと考えられる人物)の空想については、「根無し草」全体で5箇所ほど現れる。

- (16) 白鳥自身、自作が世間の種々相を写實的に描こうと志したと述べている。寺田が言う風俗と歴史の中で、このように白鳥は風俗を主に描こうとしたと言いうる。白鳥「私の信条」(『世界』一九五〇年十二月号初出。新潮社版全集九、pp. 245-250)を参照(S. 14) (p. 248)。

- (17) 『文芸』一九四八年三月号、pp. 34-47。青野季吉(一八九〇—一九六一)、河上徹太郎(一九〇二—一九八〇)、荒正人(一九一三—一九七九)との座談会である。
- (18) 『日本脱出』は『群像』一九四九年一月、四月に前編(第一部、第二部)発表。後編は『心』一九五〇年三月—十二月、一九五三年三月に発表。新潮社版全集四(一九六六)、pp. 140-390。本論文の注35(2)参照。
- (19) 『早稲田文学』一九一〇年七月初出。新潮社版全集一(一九六五年)、pp. 340-363。
- (20) 『自然主義の研究』下(東京堂、一九五七年)、p. 796。吉田は白鳥の小説を四種類に分類する。即ち、ロオカルカラーのもの、普通の日常生活(市井の世相)を描いたもの、女性の特殊な心理を扱ったもの、白鳥的な妖気のただよう世界を作っているものの四種類である(pp. 789-800)。この分類は的確だと思われる。
- (21) 『中央公論』一九一七年四月初出。福武書店版全集二十六(一九八六年)、pp. 266-288。
- (22) 『早稲田文学』一九一一年七月初出。新潮社版全集一、pp. 412-449。
- (23) 新潮社版全集、p. 429(妻の心の中の描写)、p. 430(夫がやさしくなることへの妻の不満)、p. 435(夫への妻の不満)、p. 437(夫を理解できないという妻の不満)、p. 446(近所に行きつけの寺を妻が見つけたこと)、p. 448(『女ばかりの衛生』を妻がよむこと)。
- (24) 『正宗白鳥伝』(『現代日本文学館』十二「文芸春秋社、一九六九年」初出。『伊藤整全集』十九「新潮社、一九七三年」、pp. 180-192)。伊藤整は、同じ評論で、「白鳥の」新妻のつねを全く愛情というものなしに扱う自分「白鳥」の冷酷と無関心をわざわざ目立つよう書いた小説であった」と解説している(p. 190)。武田友寿は、『冬』の黙示録——正宗白鳥の肖像』(YMCA出版、一九八四年)で、妻時子がつつましい女性として作品で描かれていると指摘する(p. 132)。

- (25) 『中央公論』一九二三年一月初出。新潮社版全集二(一九六七年) p. 109-155。
- (26) 『太陽』一九一五年四月初出。新潮社版全集二 p. 232-256。
- (27) 吉田精一はこの小説を私小説に近いとし、「牛部屋の匂ひ」と共に、「ロオカルカラーのもの」と分類する。前出『自然主義の研究』下 p. 785 p. 789参照。この小説への批評は高橋英夫『異郷に死す——正宗白鳥論』(福武書店、一九八六年) p. 114 p. 147-150より、大嶋仁『正宗白鳥』(ミネルヴァ書房、二〇〇四年) p. 86 p. 89 p. 213-214を参照しよう。
- (28) 『中央公論』一九一六年五月初出。新潮社版全集二 p. 296-324。この作品への批評は、吉田精一前出『自然主義の研究』下 p. 786、伊藤整『最後の自然主義者』(『新潮』五十九—六十二「一九六二年」)初出。前出『伊藤整全集』十九 p. 168-170 p. 170参照しよう。
- (29) 本論文、注21参照。
- (30) 『中央公論』一九二〇年九月初出。新潮社版全集二 p. 458-505。この作品への批評は、中村光夫『白鳥の作品』(一九六四年九月発表。『評論』) 漱石と白鳥』(筑摩書房、一九七九年) p. 227、兵藤兵之助『正宗白鳥論』(勁草書房、一九六八年) p. 86、武田友寿前出『冬』の黙示録——正宗白鳥の肖像』 pp. 130-132 p. 284参照しよう。
- (31) 吉田精一前出『自然主義の研究』下 p. 794。
- (32) 本論文の注13で言及した座談会である。
- (33) 『中央公論』一九二三年四月初出。新潮社版全集三(一九六五年) pp. 172-200。この作への批評は、武田友寿前出『冬』の黙示録——正宗白鳥の肖像』 p. 134、高橋英夫前出『異郷に死す——正宗白鳥論』 p. 160、大嶋仁前出『正宗白鳥』 p. 4 pp. 217-218参照。

- (34) 吉田精一前出『自然主義の研究』下、p. 792。吉田はこの作を普通の日常生活(市井の世相)を扱った作品として分類している(p. 790)。
- (35) 寺田の白鳥論で、本論で扱わなかったもので、主なものを簡略に扱う。「作家論」(一九四八年二月)は、今回の本論では、扱わないが、白鳥の夏目漱石への批判が厳しいことに對して、寺田の漱石擁護が見られることを付記する。
- (1) 「正宗白鳥の態度」一九四八年執筆(掲載誌不明)。「評論ⅠーⅠ」、pp. 351-352。白鳥には元來、調子づいた文体を嫌い続ける素質があったが、白鳥のより所は自身の發語能力であり、その白鳥の言葉が読者を引き付けると寺田は言う。
- (2) 「日本脱出」について NHK 一九四九年十一月十六日放送。「評論ⅠーⅡ」(一九六九年)、pp. 23-29。白鳥の幻想家としての資質がこの作品で生かされていること、物欲にとりつかれた登場人物みどりに白鳥の女性観が現れていること、白鳥が物欲を人間のエゴイズムの表れと見ていることを寺田はこの評論で扱う。
- (3) 「白鳥小論」『中部日本新聞』一九五三年七月十一日初出。「評論ⅠーⅢ」(一九七〇年)、pp. 227-229。白鳥の評論は、白鳥の文学の中心であること、白鳥の思想の相對主義について、白鳥の宗教性について寺田は論じる。
- (4) 「懷疑と信仰」『群像』一九五七年五月初出。「評論ⅠーⅤ」(一九七二年)、pp. 60-61。白鳥の文章には人生へのメタフィジック(形而上学)の萌芽があること、超越的觀念を長年、白鳥が扱っていること、白鳥の中で西洋と江戸期の日本がぶつかり合っていることを寺田は扱う。
- (5) 「荷風と白鳥」『荷風全集』(岩波書店、一九六四年)十月報。「評論ⅡーⅠ」(一九七七年)、pp. 134-137。白鳥の宗教性について寺田は触れる。
- (6) 「正宗白鳥の初期小説」『国語科通信』(角川書店)一九七〇年九月、十一月、「文学」一九七二年初出。「評論ⅡーⅥ」(一九八〇

年)、『pp. 160-207。これについては別稿で論じる必要がある。

(7) 「白鳥の戯曲」福武書店版白鳥全集三十(一九八六年)月報初出。『不可測の振幅』(筑摩書房、一九九〇年)、『pp. 40-45。これは寺田七十一歳の評論である。白鳥が靈魂の不滅を頭の中に持っていて、靈魂を汚辱にゆだねることを嫌ったことを主に寺田は扱う。更に、戯曲では、人間の心が他人には分らないという白鳥の認識が表現されていると寺田は述べる。

(8) 「白鳥再見」『群像』一九八六年十月初出。前出『不可測の振幅』、『pp. 49-50。他人の心は分らないという認識が、白鳥の小説にも戯曲にも現れていると寺田は論じる。

Toru Terada's "Hakucho Masamune" (1947)

Hideho IDA

Keywords : literary criticism, Japanese literature, novels

Toru Terada (1915-1995) was both a literary critic and a scholar of French literature. He ranked as a critic after Hideo Kobayashi (1902-1983), who greatly influenced Terada.

In this article the author dealt with how Toru Terada thought of the early novels of Hakucho Masamune (1897-1962). Terada started his literary career after he published an article on Hakucho in 1947. The article by Terada was recognized as valid by Hakucho himself. In the same article, "Hakucho Masamune," Terada pointed out that the main characters in Hakucho's early novels were dreamers. In this article the author examines whether Terada was right or not. He concludes that what Terada pointed out is almost right.